

梁川高校の校長として、日頃からこんな梁高生になってほしいという思いをもっている。それを先生方と生徒たちにどのように伝えるかが問題である。

笑顔にっこり

言葉はっきり

時間きっちり

表現方法は種々あるが、わかりやすくキャッチフレーズ的に表現するとこんな生徒になってもらいたいと願っている。この3つは、円滑に人間関係を運ぶ基本となるものである。また、自分や集団を向上させる原動力となるものである。

3つの中で一番エネルギーをかけたいのが、「言葉はっきり」である。自分の考えを自分の言葉でしっかりと表明できる高校生になってほしい。そして何よりも「言葉はっきり」のスタートは、あいさつと返事である。

例えば、始業式や終業式に先立って行われる表彰がある。表彰される生徒の返事はどうであろうか。体育館で表彰を行っていたときは返事をしていない生徒が多いと思っていた。場所が12月から多目的室になり、返事をしていないのではなく、返事が小さくて聞こえていなかったことがわかった。生徒を観察していると、もう少し大きな声で返事をしたいのだが、抑えているようにも見える。確かに自分だけ大きな声で返事をするのは恥ずかしいことだろう。

たまに他の高校にいくと、さわやかなあいさつを前にこちらがまごついてしまうことがある。他校と比べれば明らかに劣っているのは否定しようがない。「大きな声であいさつをしよう」「きちんと返事をしよう」というのは簡単である。だが、これは指導とは言えない。このセリフは教師でなくても言える。当たり前のことを、してほしいことをそのまま言うのは、プロの教師がすることではない。「AさせたいならBといえ」という教育技術がある。この「B」を考えるのがプロの教師の仕事である。

本校の場合は、あいさつや返事をする気持ちはもっている生徒が、なぜしないのか、できないのか。その生徒の背景、背負っているものに考えを及ぼせる必要がある。そうすれば、一人一人に対する声かけが変わってくる。「B」が生徒によって違ってくるのである。

1月15日（水）第3学期始業式の前行われた表彰では、「表彰される生徒は大きな声で返事をしてみようか」と投げかけることも考えた。しかし、やめることにした。様々なことが頭をよぎり躊躇した。生徒も私と同じような感じで、返事の大きさを抑えているのかもしれない。

「笑顔にっこり」に関しては個人差が大きい。できている生徒は多いが、全員を無理に笑顔にさせる必要はない。「時間きっちり」はおおよそできている。こちらは全員ができたほうがよい。こうしてみると、「言葉はっきり」はかなり落ちる。先生方も生徒のあいさつと返事は何とかしたいと思っているはずである。だが、生徒が抱えているものをよく理解しているためか、一斉指導に強く出ようとはしないのではあるまいか。

梁川高校にいる間は、先生方が守ってくれているからいいが、社会に出ればそうはいかない。やはり「言葉はっきり」が課題である。できれば「笑顔にっこり」もできるようにしたい。「時間きっちり」は至極当然のことである。結局は「あいさつ」と「返事」が基本なのである。